

ゼロではないはゼロ？

福島第一原発1号機への海水の注入が東日本大震災発生の日（3月12日）に一時的に中断したことについて、その原因がどこにあったのか問題となっています。

5月21日の政府の発表では、3月12日に総理官邸で行われた対策会議において、班目原子力安全委員長から「再臨界の可能性はある」との意見が出されたことを明らかにしています。これはつまり、海水注入の一時中断は政府の指示などではなく、専門家の意見を踏まえた東電の責任ということをお願いしたのだらうと思います。これに対し班目委員長が強く反発したため、政府は「最臨界の可能性はゼロではない」という発言であったと発表文を修正しています。

この「最臨界の可能性はゼロではない」という発言について、24日に開催された衆議院復興特別委員会の質疑において班目委員長は「再臨界の可能性はゼロではないといったのは、事実上ゼロという意味だ」と述べています。氏は、「私から、再臨界の可能性があるから注水はやめたほうがいい、とは絶対に言っていない」と強調していますが、政府関係者からは「専門家の意見として重く受け止めた（福山哲郎官房副長官）」という発言もあり、誠に心許ない限りです。

以上が大凡の流れですが、会議録なるものが残されていないため、3月12日の総理官邸応接室で実際にどのようなやりとりが行われたのかわかりません。しかし、一刻を争う事態の中で、そうした修辭学的な議論が行われていたとすれば、驚くというより呆れるばかりです。

「再臨界が起こる」といっても、また反対に「起こらない」といっても、明言すれば責任が生じる。「ゼロではない」という表現はどのような事態になっても言い訳ができますので、まさに責任回避以外の何ものでもありません。

よくお役人は（私もかつてお役人だったのですが）、「検討する」とか「善処する」とかいいますが、これは別に前向きに検討することでも、対処することでもなく、事実上は何もしないことと同じ意味であると批判されていますが、「可能性はゼロではない」という言葉も、実は肝心なことに対応していないという意味では、お役人言葉と同じレベルに過ぎないのではないのでしょうか。

「ゼロではない」というのは再臨界が起こる可能性が限りなくゼロに近いことなのか、たとえ僅かでも再臨界が起こる可能性があるとするれば、それは如何なる場合なのか、それを回避する手だては何か、などについて具体的でしっかりと詰めた議論をし

ていれば、全く別の展開になったのではないのでしょうか。

一連の経緯を垣間見て、班目という科学者も総理はじめ政府の要人も、結局は責任が及ばないように腰の退けた状態で議論していたようにしか、私には感じられません。

（塾頭 吉田 洋一）